

家政学＝ホーム・エコノミックス／ヒューマン・エコロジーと 俳句歳時記について（その2）

——俳句歳時記における五節句のソシオマトリックス——

百瀬靖子

Holo Ecology / Haiku Saijiki (No2)

Yasuko MOMOSE

1. はじめに

前稿¹⁾において、家政学＝ホーム・エコノミックスにおける人間と自然の関わり、人間とそれをめぐる環境との相互維持関連の生活システム認識についての観察から、わが国において私たち日本人の生活と心の関係を古来から色濃く積み重ねてきた俳句歳時記をブポルツの「ヒューマン・エコロジーのモデル」²⁾ にならって「歳時記のヒューマン・エコロジー的概念図」の作成を試みた。

本稿では、それをさらに一歩進め深化させる意味をもって、俳句歳時記から日本人の季節感を象徴する五節句の様相を調べ、日本の家族の生活の中において五節句の持つ意味を考察し、私たちの祖先が、如何に自然や季節の変化を生活の節目に取り込んできたかを「生活／食べること・着ること・住まうことと、教育や文化・行事・遊び等」に係わる観点からマトリックス図に整理してみた。

2. 五節句（五節供）について

節句（せつく）は、もともとは「人の生きとし生ける時間を年に区切り、それに細かな節を付けて意味をもたらし、楽しみや潤いを与えてきた中国の歴史的文化」の中の節（せち）というものがわが国に入り込んだものであり、季節ないし行事の移り変わり目に大切な役割を果たしてきたようである。

節（せつ・せち・ふし）を辞書で調べてみると、概ね竹の節（ふし）のことをいい、時間の流れのなかの一区切りとなる時点であり、ものの境目、竹の一ふし、1年の変わり目の区分、1年を24節に区切る季節や生活の区切り、切れ目をつける部分・箇所であるという。

節目などというように「目」になるところ、いわゆる大事なところで、多くの言葉につなが

って諸々のものやことがらを際立たせて表現するときには有効に働く単語として貴重なキーワードでもある。なお、竹冠の下のつくりの部分「即」は「御馳走」という意味であり「ひざまづいた人」の会意文字であり、節には御馳走と人がつきものであることがわかる。また、句は区切りのことであり詩や短歌、俳句の五字または七字をいう。

このことから節句とは「節日」（せつじつ・せつにち）という季節のかわり目をお祝いする日に供える供御のことをいうようである。

大きく節句というと、五節句、24節気、雑節があるが、そのうち五節句はわが国では江戸時代の始めころから庶民の家庭生活に根ざした習慣・習俗で、人日（じんじつ＝1月7日）、上巳（じょうし＝3月3日）、端午（たんご＝5月5日）、七夕（しちせき＝たなばた＝7月7日）重陽（ちょうよう＝9月9日）をいい、現在でも日本人の心に残っており、実際に行われている行事である。

一方、24節気は農耕生活と深く結びついて受け継がれてきたもので、季節をしらせる目安となる立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨、立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑、立秋、処暑、白露、秋分、寒露、霜降、立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒をいい、雑節は節分、彼岸、社日、八十八夜、入梅、半夏生、土用、二百十日、二百二十日をいい、それぞれの日にちなんだ農耕上の行事・きまりごとを行う節目を言う。いづれも今日では手紙の季節の挨拶句として使われている程度であるが、日本人の家庭生活の節目に彩りを添える習俗である。

3. 五節句の解題

A. 人日（じんじつ・1月7日）

人日とは中国で古いを行う対象として決められた行事の一つということであり、1月1日は鶏を、1月2日は狗を、3日目は豕（ぶた）を、4日目は羊を、5日目は牛を、6日目は馬を、そして7日目にして人を占い、その日を「人の日（ひとのひ）」として、お正月から7日目を一区切りとしたようである。

中国で漢の時代にはじまり、宋に入って『事物起源』に人は万物の霊長として霊辰の習俗中七草粥はもつとも一般的行事とされた。

人の日又は人日は、お正月などの華やかさはないものの、その前日あたりに小寒、いわゆる寒の入りを迎え、これから1年のうちで最も寒さが厳しい時候に突入する7日の前日、若菜野から摂ってきた春の七草／芹・なずな・ごぎょう・はこべ・仏の座・すずな・すずしろに、時には餅などを入れた粥を食することによって邪気をはらい、一年の無病息災を祈る行事の一つである。

うち、芹となずなは二薺（ふたなずな）と言い共に、寒気厳しくなりはじめの若菜野の小流れあたりに、小さくやっとなずなをだしはじめた、いわゆる雑草である。一般に葉草（草木）は、その年生え初め染た芽や花芽を一つ摘んでは吸い物の一種に扱われる。このことが実は体を調

整する役目・葉の役目を負っているように思われるが、この七草粥は正に7種類の草々により厳寒に向かう体の調整機能を果たす役目になっているようである。邪気を払うと同時に大宇からの良き気を吸収するのである。粥は雑炊となったり雑煮となったり、羹（あつもの＝スープ）となったりするが、米＋水＋火＋七草＋餅＋αで健康への滋養となっている。

人日の行事にはまた、七日爪または六日爪といって七日または六日に齊の水で軟らかくした爪を切って邪気を祓う習わしがある。長くのびた爪はアンテナとして有効であると同時に邪気にまつろわれやすい（不潔になって病気の原因になるため）ので、正月七日（又は六日）に切り落として邪気を祓い清潔にする行事（無病息災・万病除け）である。

B. 上巳（じょうし・3月3日）

紀元3世紀はじめ頃より、中国で陰暦の3月はじめの巳の日を上巳（じょうし）とよび、節句としたもので、水辺でみそぎを行い、酒を飲んで厄払いをする行事としておこったものであるが、後に宮中や貴族の間で曲水（きょくすい）という行事にあわせ発展した。

庭園に小流れを造り酒杯を浮かべ、一首歌が出来る時間と小流れを酒杯が流れてくる時間とを競うという、歌よみの風流な行事であったという。

雛祭りとは、3月3日に人形（ひとかた）で体を撫でる、その人形を流れに流して穢れを祓うみそぎ行事として行われたが、のち平安朝には人形は雛人形として女性の穢れを祓う大切な節句の会とされるようになり、室町・江戸時代に今日の雛祭り・雛壇・雛人形の原型ができ上がり、今日に伝えられているものであり、五節句の中でもっとも現代の行事として定着していると言えよう。

雛人形の顔だちや十二単の衣装は当時の天皇・皇后のお顔や衣装を反映しているといい、当時の美男・美女の面影や、当時の風俗を伝えるかわり雛人形もある。

雛祭は雛の膳、お白酒、菱餅、草餅や着物、貝合わせ、蛤など食・衣や桃の花、菜の花と明るい自然のもとでの遊びと女性のお祝いを兼ねた交遊の場であり、同時に良縁を願い、邪気を祓い、一家の繁栄を願う場ともなっている。

C. 端午（たんご・5月5日）

現在では5月5日は子供の日であり、この前後一週間程は、いわゆるゴールデンウィークとして、夏休みや年末・年始の休暇と並ぶ、まとまった休暇がとれる時期であるが、季節的な条件を加味すると最も楽しい期間でもある。端午の節句は3月3日の雛祭りと共に現在では最も生活に密着した行事となっている。

端午の「端」は「はし」または「はじめ」の意味で、もとは中国で月のはじめの午の意味で、午は五と音を一つにするため陰暦5月5日を端午節として祝い、菖蒲や蓬で祓い清め、粽（ちまき）を食べる習慣が平安時代にわが国の貴族の間に伝わったものであり、次第に民間にひろ

まったものである。

現在に伝わる端午の節句の行事は、先端に天から降りてくる神様の目印となる青々とした杉の枝を結び付けた鯉のぼりや幟を立て、武者人形を飾り、刀の形をした菖蒲と薬効のある蓬を軒に吊り、風呂に入れ邪気を祓い、柏餅や粽を食べて祝うが、この風習は日本独特のようである。(蓬はもぐさになり、薬用として飲む、食べる、風呂に入れる等多くの薬効があると言われている)

D. 七夕 (しちせき・たなばた・7月7日)

七夕の起源は陰暦の7月6日の夜から7日の朝にかけての夏から秋への交叉(ゆきあい)の祭りであったが、奈良時代以降、中国の乞巧奠(きこうでん)と相まって女の子の機織りが上達するように願うお祭りに変容し、ついでに着物が上手に縫えますように、手習いが上達しますようにという願いを短冊に書いて笹竹の枝に吊るして願掛けをするようになった。

さらに七夕のころ牽牛星(鷲座のアルタイル=彦星)が織姫星(女星=機織姫)と天の川を隔て最も接近するので、牽牛と織姫が鵲橋(かささぎばし)を渡して年に1度逢うという恋物語に発展し、恋愛の願いもするようになっている。

また、古くは七夕にお祓いを行い、笹につけた人形を祓い流す風習があったが、その後願いの短冊を吊るした七夕の笹竹を川や海に流す風習も出来ている。

現在では、商業ベースに乗った地域の客寄せイベントに変わってしまい、仙台・平塚の七夕祭りが多くの観光客を呼んでいる。それ以外にも夏の風物詩として、7月7日前後の1週間は、方々の商店街等に通りがかりの人々が願い事を書くように、何千枚もの短冊を用意しているのは、また一興である。

E. 重陽 (ちょうよう・9月9日)

古来、中国では月と日が重なる日がおめでたいということだが、重陽においても九は陽数、陽数の九が更に重なることをもって重陽といい、ちょうど菊の季節と重なるため菊づくしの行事が多く菊の節句と言われている。中国の重陽の宴が日本の宮中で節会(せちえ)として行われるようになり、酒に菊をうかべ、小流れに杯をうかべて歌をよむ曲水の宴などが行われた。また、農民は農作物の収穫期としての行事(収穫際・感謝祭)を伴う刈り上げの節句であり、秋の氏神様の祭りもその流れのなかにあるようだ。

4. 歳時記にみる五節句(五節供)の生活マトリックス

上述においてA, B, C, D, Eのとうり五節句の由来・行事等の概略を示したが、ここで歳時記から各五節句に係わる季語について生活システムとしての「食べること」「着ること」「住まうこと」および、ゆとりとしての「遊び」や「行事」のほか、「地球環境」や「植物」・

「気候」・「天文」等エコロジーとの関わりも加味してマトリックスに分類してみた。

俳句歳時記による五節句の生活ソシオマトリックス

節句 生活の 環		五節句 (五節供とも言う)					節句 生活の システム
		A	B	C	D	E	
		人日 (じんじつ) 1月7日	上巳 (じょうし) 3月3日	端午 (たんご) 5月5日	七夕 (しちせき) 7月7日	重陽 (ちょうよう) 9月9日	
人と 物	食 べ る こ と	(あつもの) 七草粥・七草の葵	雑料理・雑の膳 雑の酒・雑菓子 雑の貝・菱餅	菖蒲酒・ちまき 柏餅・菖蒲汁 (集め汁)		菊の酒・菊の膳 菊膳・温め酒	人・物・技・術の相互作用 物の相互・作用 人互・作・心用 自然と物・人・技術の相互作用
	着 る こ と	七日爪・六日爪			水浴・髪洗い・貧小袖	菊綿	
	住 ま う こ と		雑の間・雑の灯	軒菖蒲・菖蒲湯 蘭湯	(たなばた) 七夕飾り・井戸替え 机洗う	菊枕	
	行 事 遊 び	七草粥・七日爪 登高 なずな囃・囃詞	女兒節句・桃の節句 雑祭り・雑事 雑飾り・雑流し 曲水・鬪鷄 雑遊び・雑合わせ 雑の使い・雑遊び 山遊び・花見正月	菖蒲・男児節句 武者人形・菖蒲刀 鯨・鯉のぼり・吹き 流し・矢車・菖蒲見 草矢・菖蒲打 印地打・菖蒲狩り 薬狩り	七夕祭・棚機・星祭 硯洗い・真菰の馬 七夕馬・願いの糸	重陽の宴・菊の節句 収穫祭・おくにち 登高・菊供養 ぐみの袋・菊花展 菊人形・菊合わせ 菊細工・菊焚く	
環 境 ・ 自 然	地 域 環 境	若菜野			稲の露 芋の露		
	植 物	七草 (芹・なずな・ ごぎょう・はこべ・ 仏の座・すずな・す ずしろ)	桃の花・椿・菜の花	菖蒲・菖蒲田・蓬 菖蒲池・菖蒲引く 薬引く・薬降る			
宇 宙	気 候	寒	啓蟄	輕暖・薄暑		菊日和	
	天 文				天の川・銀河・牽牛 織り姫・ひこ星		
目 的	起 源 効 能	万病除け	穢い・将来の祝祭	穢い・武運長久	文字・裁縫の上達 穢い・農耕の安全	穢い・息災	目 標

(作成：百瀬靖子・1997)

5. 結語

(1) 先に家政学=ホーム・エコノミックス/ヒューマン・エコロジーと俳句歳時記の世界が相通っていることを確認したが、本稿において五節句を取り出し、ソシオマトリックス図に当てはめてみた。

横軸に五節句を、縦軸に生活システムとしての食べること、着ること、住まうこと、遊びと行事および自然（天文・地理・動植物）を配した。

(2) その結果、五節句のいずれにおいても「遊びおよび行事」に多くのプロットが集積された。このことは、五節句のいずれにおいても豊かさや潤いをもたらす基本的システムが集まっていることを物語る。遊び・行事はもともと食べること、着ること、住まうことおよび自然の集約でもあることを物語、五節句の中心は「遊び・行事としての文化」であるといえる。

(3) 今日、家政学や生活経営学の各分野領域において、たとえば五節句のような自然の季節の変遷に応じた「遊び・行事」の生活や文化における意味合いを考えて見ることも必要であろうかと考える。

引用文献

- 1) 百瀬靖子 家政学=ホーム・エコノミックス/ヒューマン・エコロジーと俳句歳時記について 東京家政大学 生活資料館紀要 No1 p.17-32 (1996)
- 2) 今井光映 ブルツ=ソングのヒューマン・エコロジー論 アメリカ家政学現代史II 光生館 180-188 (1995)
松島千代野 家政学における学問性と家政性の力動関係 家政学原論集成 学文社 p.96-97 (1987)
関口富佐 家政哲学 家政教育社 (1997)
- 3) 石 寒太 毎日新聞社 俳句αあるふぁ編集論「暮らしの歳時記三百六十五日」 p.154-197 1-153 (1997)
- 4) 平井照敏編 「新歳時記 春 夏 秋 冬 新年」河出文庫(1996)他多数の歳時記など
- 5) 大竹美登利 ライフスタイルの変化と環境 家政誌, 378 973-979 (1996)